
ぱそシス (ぱそこんシスターズ)

fiiyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぽそシス（ぽそこんシスターズ）

【Nコード】

N7486Y

【作者名】

f i i y u

【あらすじ】

新しいパソコンがうちに来た。古雅^{わたし}言子の家族は、そっちのけで夢中になる。へわたしはそんなパソコンに、まるで新しい妹でもできたように嫉妬し、壊してしまう……ショートな家族再生物語。

新しいスニーカーの香り、履きつぶされたスニーカーの香り。新しいパソコンの香り、馴染んだパソコンの香り。わたしの靴下のおい……ちよびつとだけ毒を含んでる。

わたし、古雅言子。コガコトコ。別に、毎日風呂は入ってる。

ま、そういうことで、新しいスニーカーよりは新しいパソコンのほうが機会が少ないから、うちに来たことを喜んでいいんじゃないだろうか。まるで新しい赤ん坊でも来たというようで、お父さんもお母さんも、すぐく喜んでしまっている。特に、お父さんの狂喜乱舞のしよりはすさまじく、ものすごい。あたかも、自分の手柄だといわんばかりだ。いや、お父さんの手柄なだけどさ。働いているし、大黒柱なんだし。

わたしだって！ もう十四年もこの体とか、この脳とか、この瞳……生まれた時から持っているパパママ恋しの感情を使っているけれども、古びたこと、ない、よ？

なのに。

まあったく！ お父さんもお母さんも、二人ともパソコンに夢中ときたもんだ。どこが楽しいんですかねえ、この薄っぺらい板の。そういえば、パソコンって板ではなく箱の時期があったようだけれども、わたしは存じません。

カチ、カチ、カチ、マウスのクリック音がする。会社で使っているのだろう、お父さんは慣れたものだった。ネット？ とやらの接続もお茶の子さいさい。ふうん、ネットねえ。よくわかりませんが、わたし、雨粒のついた蜘蛛の巣は好きですよ？

「ほら、言子。なにか調べたいことはないか？」

「じゃあ、お母さんの体重」

「これ」と、お母さんは言う。

「へーんだ」わたしは二階に駆け上がってしまった。

自分の部屋に入り、ふう、と息をつく。

パソコンかあ。

別に、欲しくはないぞ。
なのに。

「へえ、ココんち、新しいの来たんだ。見せてよ」

※

その女子は、真新しい革靴を履いていた。けれども、もう足のサイズは新しくなりそうではなかった。わたしより少し背が高かった。けど、靴のサイズは同じってことまで知ってるんだ。こういう時、女子ってえのは運命すら感じてしまうものなんだよ。

「新しいパソコン？」

「そんなに面白いもんじゃないわ」わたしは鞆を机に置いている。

「お父さんもお母さんも、まるで子供ができたみたい」

「はあ？」

教室は、わたしはよく大きなおトウフにたとえることがあるけれども、とにかく、色々なものをぐつぐつ内包しているのだった。男子とか、女子とか、先生とか――あ、こういうと先生が男でも女でもないようだな。

「見せて。興味あるの」

こう言ったのは、わたしの一番の友人のみえちゃんだった。

みえちゃんは言う。「文芸部の部室にあるやつも、結構古いでしょ？ だからあたし、餓えてるの」

そんなわけ。で。

みえちゃんは、わたしのうちに来た。みえちゃんは、わたしたちのパソコンを使った。みえちゃんは、慣れた手つきだった。この手がたまに勉強したり、ボールを使ったり、わたしをへべしっゝとやったりすることを知っている。

みえちゃんは、わたしの親友だった。

「あら、お客さん？ 珍しいじゃない」と、お母さんが出てきた。
「こんにちは」

お母さんは礼儀正しさに対して、まるで「よい」と言う女王みたいに応対した。でも、その換言された言葉は。「こんにはちえー。」

「新しいパソコン見せてるんだ。いいでしょ？」

「壊さないようにね」

みえちゃんは、パソコンのフォルダとかいうやつを開いた。「あ、ここ」

「どうしたの？」

「写真とかが入ってるみたいだよ。デジカメの」

わたしはそれを見てみた。

お父さんの、飲み会で友達と撮ってきた写真があった。お母さんの、カルチャーセンターでの写真があった。フラワーアレンジメントだ。わたしのは一枚もない。まあ、当然だけれど。

「ちえー」

「なにが？」

「なにもかもを飲みこんでるのが、気に食わないの。ピノキオに出てくる鯨みたい」

「ナニガナニヤラ」と、みえちゃんは言っていた。

これじゃまるで、魔力に取りつかれたようだわ。みえちゃんが出ていったあとも、お父さんが帰ってくると、二人はパソコンで色々やっていた。昭和の時代、新しいテレビが来たら人ってこんなふうになったのかしら。でも、それより何倍も病的に感じるのは、気のせいかしら。だって、これはみんな、じゃないもの。プロレスやプロ野球について、翌日、語り合うこともできないもの（そんなことは知ってるわけだ）。

「わたし、もう寝るよー？」

おやすみ、と二人とも生返事をしていた。

立場が逆ジャナイカ。

夜中、わたしは目覚める。闇と闇の間に、光速よりも素早い闇が入りこんでいる。わたしは水が飲みたくてたまらなくなったので、

台所に行く。すぐそばの部屋にパソコンは置いてある。

わたしは水で溺れるつもりで、じゃぶじゃぶ、がぶがぶ飲むと、ふいにムカツキに襲われた。

なぜだろう？　なぜ、こんなことをしてしまったのだろう。もし、わたしの年齢に一歳でも上下があれば、上手くだだをこねたり、上手く我慢したりできていたはずなのに。こんな、うしろから鋭利なナイフ状のもので刺すような（なんか変な言い方だけどさ！）真似はしなかったはずだ！

わたしは水差しに水を汲んだ。花瓶にも汲んだ。コップにも汲んだ。かわいいコップ、大きなコップ、こまっしゃくれたコップ。

パソコンのある部屋は静まり返っていて、そのかわいいコップの波音すら聞こえそうだった。わたしはコンセントからプラグを引き抜くと、感電しないようにする。

そして、満杯になった溢れんばかりの水を、パソコンにおつかぶせている。

※

翌日、水もしたたるパソコンになったソレを発見して、お父さんが悲鳴をあげている。

「どうして、こんなことをした？」

わたしは沈黙している。

「どうしてだ？」

わたしは沈黙している。

わかつてはくれまい。わたしは嫉妬していたのだ。ああ！　これが、お父さんの浮気だとか、お母さんが本当に妊娠したとかであれば、どんなに良かったことだろうか。それにはつまり、一片の正しさめいたものがあるのだ。なのに、相手はパソコン。感情がないものの代名詞じゃないか。

「働いて返せばいいんでしょ」

お父さんは、拳を握りしめた。

「別に、いいでしょ？　出世払いで」

ごちん！

※

痛い。まるで、常に針が頭に刺さっているかのようなだ。わたしは学校に行く気になれず、近くの公園に向かっている。こうなりゃ、とことんまで反抗してやるつもりだった。不良だ、不良になってやる。そして、十代の若さで結婚してやる。そんでもって、ええと、ええと……想像することすらできないなんて！ わたしは、なんて貧困貧弱だったのだろう。

わたしは公園の水飲み場で、栓をひねった。小さな噴水に口をつけた。噴水はわたしを突き抜けたそうにしていた。

ベンチに座りこみ、怠惰な時間を過ごした。わたしの感情なんて大したものじゃないから、怠惰でいいんだと思う。だらーっと。こう、だらーっとね。

「やっぱここだった」

みえちゃんだった。

みえちゃんは、なにを言うでもなくわたしの隣に座った。わたしだったけれども、自然に、あたかも砂山が、満ちてくる波にさらわれてって、壊れるような自然さで、彼女の膝に頭が吸いこまれていった。

そして、手がこめかみに。

涙が出そうだよ。

「もうなおらないんだ。パソコンも、わたしたち家族も」

で、泣き言をつらつらと。

「本当にそうかしら？」

「ほんとだよ。わたしんち、もう冷酷な家庭になっちゃったんだ。非情だよ」

「この前、家族旅行で写真を撮ったばっかだと言ってたばっかじゃない」

「その時とは違うよ。うん……あの頃は良かった。あの頃は、家族が一体になってたよ。もう、わたしにはみえちゃんしか、ないよ」

「でも、泊まらせてあげない」

「ちえー」

でも、わたしは頭を吸いこませ続けた。

「わたしのパソコンの知識はね、お兄ちゃんからの受け売りなんだ」

「そうなの？」

「相談してみるよ。だから、パソコンを見せてくれない？」

人、それを民族大移動とか、出エジプト記とか、エクソダスとかと呼んだのであるが。

二人ともわたしを心配していたというのに、家族なのに遠慮していたというか、家族だから遠慮していたというか「気持ちをおもんぱかって」いたいみたい。おもんぱかる……こんな言葉は地球と宇宙から消失しろ！ 喧嘩しようぜ！
とはいっても。

わたしとみえちゃんは、寝静まった夜に家に入りこむと、丑三つ時、ウェットなパソコンを運び出しにかかった。なんか、夜逃げでもしているみたいだ。えっちらおっちら、二人で支えるように持って、いつもはゴミ捨て場まで運ぶ用の台車に積んでから、ガラガラガラと移動させた。

で、みえちゃんち。

みえちゃんのお兄さんは、言った。「ハードディスクがイカれていなければ、直るだろうね」

「なおる、か」わたしは言った。わたしは空を見上げた。「なおるの、無理だろうなあ」

「なにが？」みえちゃんは言った。

決まってるだろうに！

わたしは、お兄さんを応援することしかできなかった。お兄さんは手際よく、まるで説明書があるっていうようにパソコンを分解していった。パーツに並べ、他の機器と接続したり、画面を見たりしながら作業を進めていった。画面には、ええと、窓、というか、長方形？ というか、まるでわたしを責めるような長方形？ ではな

く、文字列が浮かんでは消えていた。

「ふあーあ」と、失礼にもわたしは、あくび。噛み殺した。

「そろそろ寝ようか、ココ」と、みえちゃん。

「そうだね」わたしは言った。「でも、待ってるよ。なおるかどうかの瀬戸際なんだから、失礼してもんでしょ？」

みえちゃんは部屋に戻っていった。

「あの、わたしがなにかお手伝いすることはありませんか？」

「そうだな。じゃあ、夜食を作ってもらおうか」

露呈した。

わたし、料理、全然だめなんだった……

なおらないかも。

わたしが、うつらうつら、から、こっくりこっくり、に移った頃、唐突にみえちゃんのお兄さんは叫んだ。

「できたぞ！」

※

結局のところ、ハードディスクだけだった。助かったのは。わたしは、液晶一体型（って？）じゃなくなった、まるで盲腸が沢山ついたような、部品だらけのパソコンを台車に載つけて帰っていった。家に近づく、明かりがついているのがわかった。

そこで、お母さんは泣いていた。

「どこに行ったのか……本当に。こんなことになるならば、パソコンなんて買わなければ良かった……！」

そこで、わたしは登場している。「ただいま」

二人とも、わたしを見る。

ごちん！

「いったあい！」

お父さんは、悲しみを全て怒りに化学変化させたらしかった。

「どこに行ってたんだ！」

「えと、パソコン、なおし、かな？」

お父さんの拳が、ふとゆるんだようだった。

「それより、見て！」

わたしはパソコンを部屋に運び、電源を入れた。ブーンというファンの音がして、画面がチラついたあとに、つく。OSもそのまま、窓が開き、まるで命が宿ったかのような音だった。こんな表現もあたるように、わたしには思えたんだ。わたしはマウスをたどたどしい手つきで、まるでわたしが料理でもする時のように扱っていき、とても遅い速度の中で開いた。

「見て、お父さん、お母さん……写真とか、そのままだから」

「あ、ああ」と、お父さん。

「それじゃあ、二人で好きに楽しんで。わたし、眠いからもう寝るよ」

わたしは行こうとした。

わたしは立ち止まった。

誰の意志でもなかった。わたしは自ら一步を踏み出したのだ。

「でも、もし良かったらだけど……家族旅行の写真あったから、それを取りこまない？」

※

ふあーあ。わたしは目覚め、パソコンの部屋に赴いている。まったく、本当に子供みたいに一室を与えらてるんだから。わたしは不格好になったパソコンを小突いて、電源を入れた、あちこちが出張ったり、へこんだり……わたしはわたしの体を見下ろす。

わたしもだな。

わたしは家族の写真を表示させていた。USBにプリンタどうらしいを接続して、プリントしていた。

しげしげとながめた。家族旅行、ちょっとした山に登った様子が映し出されていた。

ここから、また発展していくこともできるだろう。また山に登り、またパソコンに取りこむようなことだってできるだろう。

「ま、仲良くやっていきましょうや」

わたしは、まるで弟か妹に呼びかけるようだった、

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7486y/>

ぱそシス（ぱそこんシスターズ）

2011年11月22日14時41分発行